

1. 特に効果的であり改善に資した事例
C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策
①FD体制の整備充実

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

①FD体制の整備充実

〈人社系〉

●東北大学情報科学研究科

「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本プログラムを担当する教員には、学校・大学で実施されている情報教育の実態の現状を正確に知り、その理解を共有する必要がある。そのために、学内外また海外から「FD研修」と称して多数講師を招き、学習・課題の発掘、解決の方法発見などに努めた。その一つとして、仙台市・宮城県の小中学校で勤務する教員及び大学教員と協働して「情報活用型授業を深める会」(通称:「ジョーカーの会」)という学習組織を立ち上げ、「教育の情報化」の一層の効果的推進を図った。現在もほぼ三カ月に一度、定期的で開催している。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「教育の情報化」を強化し推進するためには、学校現場で実際に授業に従事している教員のその面での教育力・指導力が向上し、授業自体の内容・レベル・質が高まる必要がある。そのために、「ジョーカーの会」では、実際の授業をその場で再現し、そこで使用する情報手段・道具、また機器などの効果的かつ有効な使用法を、参加者全員で討議し探究した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学教員は、ややもすれば教育現場の実態を十分に知ることなく、専門的に高度な理論をかざし、改善・改良を迫る。しかし、特にFD研修では、現場や実践的に精通している講師を多く招き、また多くの小中校の現役教員と一緒に学習することを重視したゆえ、現場の生の声や悩みに触れることができ、それを踏まえて授業科目の内容・質を一層改善・改良することができ、より充実した事業展開を図ることができた。

〈理工農系〉

●大阪大学工学研究科生命先端工学専攻

「国際連携大学院FDネットワークプログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

教員の海外FD研修を、米国カリフォルニア州立大学フルトン校(California State University Fullerton, CSUF)で実施した。研修期間は2週間で、毎回5-6名の教員が参加した。計5回実施し、生命先端工学専攻の教授7名、准教授8名、助教12名の計27名が本研修に参加した。研修は主として、プレゼンテーション技術やファカルティ・ディベロップメント(FD)に関する講義の受講、学部および大学院の授業参観、およびCSUFの学生への授業の実施、から成る。最終的に阪大教員はメンター教授のクラスで40分から

1. 特に効果的であり改善に資した事例
C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策
①FD体制の整備充実

1 時間程度の授業を行い、研修の評価を受けた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

海外FD研修をどこで行うのが良いのかまず検討した。米国には、FD研修プログラムの充実している大学は数多くあるが、その中からCSUFを研修先として選んだ理由は、米国西海岸にあり日本に比較的近いこと、研修費用や滞在費が他の大学より安く、限られた予算でより多くの教員を派遣できること、奈良先端大学教員受入の実績を有すること、などである。次に、研究分野が似ているCSUFの教員を研修の指導教授として選んでもらうことを目的として、CSUFの職員による派遣教員に対する電話インタビューを行った。また、指導教授とメールで研修内容について打ち合わせを行い、研修が効率よく実施されるように工夫した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

教員の海外FD研修の効果を評価するために、英語コースの留学生へのアンケート調査を行った。評価項目は、コース全体、講義全般、講義数、教員の英語レベル、特別課題演習、教員の研究レベル、キャリアとしての重要性、の7項目である、その結果、5年前と比較するといずれの項目においても格段に高い評価が得られたので、海外FD研修により教員の英語による授業方法、指導方法は大きく改善されたと考えられる。また、すべての教員が、海外FD研修は大変有意義で、研修で学んだことは日本語で行われる日本人学生への講義にも生かせると考えているので、教員の日本語による授業方法、指導方法も大きく改善されたと考えられる。

《医療系》

●新潟大学医歯学総合研究科口腔生命科学専攻

「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院教育の改善を進めるには教員の意識改革が不可欠である。そのため、継続的かつ多様な内容による大学院FD・WSを展開すると共に、大学院学生にはスキルアッププログラムとしてFDに参加させ、教員と共に問題点の共有化、解決策の模索を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

FD・WSでは単に教育開発に主眼を置いたテーマを設定するのではなく、多岐にわたるテーマ設定を行った。また、大学院学生をFD・WSに教員と参加させることにより、教員と共に大学院教育の問題点を共有化し、解決策の模索を図るようにプログラム設定を行った。最終年度には国際シンポジウムを開催し、本取組の外部評価を行い、さらなる大学院教育改善の必要性を共有させるようシンポジウムプログラムの立案を行った。

1. 特に効果的であり改善に資した事例 C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策 ①FD体制の整備充実

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国際シンポジウム終了時に行った教員アンケートでは、84%がシンポジウム開催意義を肯定的に評価し、また内容については80%の参加者が分かりやすかったと回答した。本プログラムによる大学院教育改革が教員や学生に広く認知され、現状に対する問題意識が共有されていることを示していると思われた。また、大学院学生からも大学院教育改善に対する肯定的な意見がよせられ、シンポジウムが大学院学生にとっても、そのあり方を考える良い機会となったと考えられた。教員からは「海外のシステムが良く分かり、今後の参考となった」という意見が大半を占め、本学の大学院教育改革をさらに推進していくことが共通事項として理解されたと考えられた。

●東海大学医学研究科

「生命倫理学重視の医系大学院教育拠点形成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

指導教員対象のFDの一環として、内外の講師による講演会・勉強会を年間を通じて開催しているが、本教育プログラムを継続中の3年間は、特に生命倫理学に関する話題を選び、講演会を開催した。その回数は年度ごとに異なるが、10回/年を基準とした。また、米国のCITI教材の日本版を本教育プログラムの中でe-learningとして作成し、指導教員だけではなく、学生にも学習させた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

FD講演会では、生命倫理学の概念からその実際の応用に至る内容を、3年間にわたりグレードアップする形で企画した。生命倫理学教育のe-learning作成では、我が国の実情に合った説明を加え、一部では至適な変更を加えた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

生命倫理学という比較的新しい学問・概念を指導教員に理解、周知することができた。研究計画策定や学生の研究テーマの指導において必須であるこの概念が、指導教員だけではなく学生にも浸透してきており、教育効果が大きかった。